

正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属 様式

山本, 教人
Institute of Health Science Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/555>

出版情報 : 健康科学. 13, pp.49-58, 1991-02-08. 九州大学健康科学センター
バージョン :
権利関係 :

正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式

山 本 教 人

Motives for participation to intercollegiate athletic clubs and
attributional styles of regulars and reserves

Norihito YAMAMOTO

Summary

The present study was designed to assess the relationship between motives for participation to intercollegiate athletic clubs and causal attributional styles of regulars and reserves. Two hundred and eighteen 3rd-year students, who majored in physical education and were belonging to athletic clubs, completed the author's(1990) participation motivation inventory which assessed 52 reasons for participation. Causal attributional styles were assessed with a slightly modified version of the Weiner and his associates' four standard of causal attributions.

Main findings were as follows:

- 1) A factor analysis suggested that seven categories of motives existed; that is, "achievement", "expectation", "avoidance of disadvantage", "health and physical fitness", "social usefulness", "free and equality", and "avoidance of anxiety" motives. Participation motives extracted from this study were, for the most part, identical with the motives that were found out in the author's previous study. Among these motives, "achievement" motive was most significant.
- 2) A comparative study regarding attributional styles was undertaken by asking regulars and reserves the reason that they had been regulars/reserves. The results of comparison by four standard of causal attributions revealed that while the regulars more attributed to "effort" and "luck" than the reserves, the reserves more attributed to "task difficulty" than the other. The next comparison was carried out based upon two-dimensional classification; namely, locus of control and stability dimensions. The results indicated that both regulars and reserves more attributed to internal factor than external one, and stable and unstable factors exerted reverse influence on the regulars and the reserves. Thus, regarding for the reserves, egocentric causal attributional pattern was not supported in this study.
- 3) Finally, the relationship between participation motives and attributional styles of regulars and reserves were examined. Regarding for the reserves, significant negative correlations existed between internal, unstable attributions and "achievement", "expectation" motives. This means that the reserves have no intention of doing the best, in spite of their recognition that they could not be regulars because of their lack of effort.

(Journal of Health Science, Kyushu University, 13 : 49—58, 1991)

緒 言

個人のスポーツへの接近行動を、当該個人の動機面から明らかにしようと試みるスポーツ参加の動機に関する研究は、これまで体育・スポーツの社会心理学の分野を中心に行われてきた。従来よりこの分野では、参加動機と他の変数（例えば、チームの成功や成員の満足度等）との関係を問う研究^{5),6),7),9),11),21)}が主流であったのに対し、近年ではスポーツ参加に関連のある動機の分類と、個人の属性によるその違いを比較するもの^{1),13),14),19),24),25),26)}が主流になりつつある。

ところで著者は、我が国青少年のスポーツ参加が、主として学校の運動部参加に媒介されているという事実に着目し、大学生を対象に大学運動部への参加の動機に関する研究²⁸⁾(1990)を行った。その結果、部員を運動部に所属させている最も重要な理由として、やめることに伴う人間関係を中心としたトラブルを考えるとやめられないということが明らかとなった。また、動機が心理的、社会的な行動の推進力を意味する概念であることから、個人の運動部参加の動機もその個人の集団内に有する地位や、その時々的心灵的な状態等の心理、社会的諸要因によって影響されるであろうことを勘案した結果、彼が正選手であるのか補欠選手であるのかはそうした重要な要因のひとつになり得るであろうと判断して両者の運動部参加の動機の比較を試みた。比較の結果いくつかの重要な差異が発見できた。

ところで、何かにつけ結果に対する原因を探ってみることは日常生活の中で我々がよく体験することであり、うまくいった時には自己の力を過大に評価し、逆にうまくいかなかった時には失敗を他の何かの原因にしたいくなるものである。周知のように Weiner et al.³⁰⁾は、達成結果（成功・失敗）に対する原因帰属の主要な要因として努力、能力、運、課題の困難度という4要因を抽出し、さらにそれらを2要因毎に組み合わせた分類システムを提示した(表1参照)。つまり、安定性次元と統制の位置次元である。安定性次元からみた場合、能力と課題の困難度が安定要因として、努力と運が不安定要因として分類される。一方、統制の位置次元からみれば、努力と能力は内的要因とされ、運と課題の困難度が外的要因として扱われる。スポーツの達成場面においても、これまで以上の枠組みを基本とし様々な研究^{12),16),17),20),27)}がなされてきた。本研究が競技達成場面とは直接的な関連を持たないとはいえ、選手が正選手あるいは補欠選手であることの原因を何に求めているのかを明らかにし、その原因と彼らの運動

部への参加動機との関連を問うことは、それらが選手の競技や練習に対する意欲や行動に影響を与えるといった意味で指導上重要であると考えられる。

表1 原因帰属要因の2次元分類

| 安 定 性 | 統制の位置 | |
|-------|-------|--------|
| | 内的 | 外的 |
| 安 定 | 能力 | 課題の困難度 |
| 不安定 | 努力 | 運 |

このように、本研究は正選手と補欠選手の運動部への参加動機と彼らが正選手あるいは補欠選手であることに対する原因の帰属様式との関連を検証することを目的とし、運動部に所属している3年生の体育学部学生を対象に、以下の手順で分析をすすめたい。まず第1に、体育学部の学生がいかなる動機で運動部へ参加し続けているのかを因子構造の次元から明らかにし、正選手と補欠選手では参加動機に違いがあるのか否かを検証する。第2に、正選手と補欠選手各々に、彼らが正選手、あるいは補欠選手であることに対しどのような原因を主観的に当てはめるのかを、Weiner et al.の原因帰属のモデルを使って検証する。最後に、以上の研究結果をもとに、正選手と補欠選手の運動部参加の動機と彼らの原因の帰属様式の関連を検証する。

方 法

1. 対象

本研究で調査の対象となったのは、F大学体育学部で運動部に所属している3年生、218名（男子156名、女子61名）であった。彼らが専門とするスポーツ種目は、25種目に分けることができた。調査期間は1990年6月14日、21日、28日の三日間であった。

正選手と補欠選手の概念上の区別は、これまで選手であった割合と、これから先選手になれる見込みの両面からつけられた。具体的には、調査対象者全員に、大学に入学以来今までに大学対校戦等の主要な大会に選手として出場してきた割合と、調査の時点から一年以内に行われるそのような大会に選手として出場できるであろう可能性について自己評定してもらい、これまで「ほとんど毎回選手として出場した」と答え、これからも「ほとんど毎回選手として出場できると思う」

表2 参加動機調査の質問項目

1. 所属していることを誇りにできるチームだから。
2. 技術,あるいは記録が向上した時の喜びを味わいたいから。
3. 励ましてくれる仲間がいるから。
4. 勝利を体験したいから。
5. 常に体を動かしていきたいから。
6. やめると仲間にはけるようで悔しいから。
7. 体力をつけたいから。
8. やめるとチームメイト,あるいは指導者に非難されるから。
9. 運動した後の爽快感が味わいたいから。
10. やめてしまうと,とりえがなくなるようで不安だから。
11. 日常生活で困った時に助けてくれる仲間がいるから。
12. まだまだ技術,あるいは記録が向上するという望みがあるから。
13. やめたら身を置く場所がなくなりそうで不安だから。
14. 成員としての価値を感じることができるから。
15. 他人にはできないような貴重な体験をしたいから。
16. やめると仲間に見えなくなると思うから。
17. 健康を維持したいから。
18. 日常生活でたまったストレスを発散させたいから。
19. やめたら今まで一生懸命にやってきたことが無駄になると思うから。
20. チームの雰囲気が好きだから。
21. レギュラーの座を取りたいから,あるいはずっとレギュラーでいたいから。
22. 人間的に尊敬できる人が身近にいるから。
23. 成功して有名になりたいから。
24. 常に何かに打ち込んでいきたいから。
25. やめるとチームメイト,あるいは指導者に迷惑をかけるから。
26. シェイプアップされた魅力的な身体でいたいから。
27. やめるとチームメイト,あるいは指導者との関係が気まずくなるから。
28. 練習中,あるいは競技中はいやなことを忘れられるから。
29. やめると意志の弱い人間だと他人に思われそうでいやだから。
30. だれもが平等に練習できるから。
31. 少しでもうまくなり,あるいは良い記録を出し,競技を楽しめるようになりたいから。
32. 技術的な面でアドバイスしてくれる人がいるから。
33. 成功して他人を見返してやりたいから。
34. やめると出身高校の指導者,あるいは後輩に迷惑をかけるから。
35. 充実した生活をおくりたいから。
36. やめると友人がいなくなるから。
37. やめないで続けたという満足感が味わいたいから。
38. おしつけられず,自主的に練習できるから。
39. チームの勝利に貢献したいから,あるいは貢献できるようになりたいから。
40. 続けていると就職に有利だから。
41. やめることで,せっかくできた友人を失いたくないから。
42. 厳しい環境の中で自分を試してみたいから。
43. 続けていると部内外に多くの友人ができるから。
44. 最後まで続けることが目標だから。
45. やめたらチームの雰囲気を乱すから。
46. 将来指導者となるために必要な資質を身につけたいから。
47. やめると就職に不利になるから。
48. 部活を通じて一生の友人を得たいから。
49. やめたら生活が乱れそうだから。
50. やめたら何をしたいかわからなくなりそうで不安だから。
51. 四年間続けることは,社会的な信頼を得ることにつながると思うから。
52. やめたという挫折感を味わいたくないから。

と答えた者を正選手として、そして、これまで「ほとんど毎回選手として出場しなかった」と答え、これからも「ほとんど毎回選手として出場できないと思う」と答えた者を補欠選手として分類した。以上の手続きを経て48名が正選手として、92名が補欠選手として分類された。なお残りの78名については、どちらにも分類できない者として、因子分析以降の比較分析からは除外した。

2. 質問項目

本研究で用いた運動部参加の動機に関する質問紙の質問項目のすべてを表2に示した。用いた質問紙の項目は、Passer²⁵⁾のスポーツ参加の動機カテゴリーを参考に著者が独自に作成したものであった。参加動機の測定スケールには、「1」そう思わない、「2」どちらかというと思わない、「3」どちらともいえない、「4」どちらかというと思う、「5」そう思うの5段階評定を採用した。

正選手と補欠選手の原因帰属様式の測定項目には、Weiner et al.³⁰⁾が提示し、従来より多くの研究が依拠してきた「努力」、「能力」、「運」、「課題の困難度」の4要因を採用した。なお、スポーツの達成場面における原因帰属因に関しては、これら4要因以外にも報告例がある^{16),17),27)}が、本研究は競技の達成場面とは直接関係がないとの理由から、これらをそのまま採用した。ただ「課題の困難度」に関しては、個人が所属しているチームの競技レベルの高低に伴う、当該個人の正選手へのなりやすさで代表させた。具体的には以下のような形式で質問した(カッコ内は補欠選手への質問の形式を示す)。つまり正選手、補欠選手各々に、あなたがこれまで正選手(補欠選手)として試合に出場できた(できなかった)原因として、次に示す意見はどの程度あてはまりますかとし、「努力したから(しなかったから)」、「能力があったから(なかったから)」、「運に恵まれていたから(いなかったから)」、「部の競技レベルが低く(高く)、選手になるのが容易であったから(困難であったから)」の4つの意見に対し、あてはまると思う程度に応じて「1」全然あてはまらない、「2」あまりあてはまらない、「3」ややあてはまる、「4」非常にあてはまるの4段階で答えてもらった。

3. 分析の手順

データの分析は、まず因子分析(主因子解法、バリマックス回転)により体育学部学生の運動部参加に関連のある動機の抽出を試み、それが正選手と補欠選手に及ぼす影響を比較検討した。次に、正選手と補欠選手の原因帰属様式の比較を、まずは原因帰属の4要因

毎に、そしてそれらの2要因毎の組み合わせによる、統制の位置次元と安定性次元毎に行った。これらの差異の検証にはすべて素点をもとにしたT検定を用いた。最後に、正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式との関係を単回帰分析により検証した。

結果と考察

1. 参加動機の因子構造

体育学部学生の運動部参加に関連のある動機を明らかにするために、まず52の質問項目に関し主因子解法による因子分析を行ったところ、固有値1.0以上の因子11因子を抽出できた。抽出された11因子が全分散に占める割合は66.5%であった。次に、この11因子に対しバリマックス法による軸の直行回転を行ったところ、貢献量1.0以上の因子7因子を抽出でき、体育学部学生の運動部参加の動機が7因子構造であることが明らかとなった。なお、抽出された7つの因子で全分散の52.1%が説明できた(表3参照)。

因子の解釈と命名は、因子負荷量0.5以上の項目をリストアップし、その内容を検討することにより行った。第1因子には技術や記録の向上に関わる8項目が高い負荷を示しているため、「達成」因子と命名した。第2因子には9項目が高い負荷を示した。この中には、これまで親和動機として報告されてきたような項目(43.と48.)や、著者が先に固執動機として分類したような項目(44.37.52.)が含まれているが、いずれも部活動を続けること自体が与えてくれる有形、無形の満足感に対する期待に関わる項目であると判断される。従って、第2因子には「期待」因子と命名した。第3因子には7項目が高い負荷を示した。それらは、いずれもやめることに伴う不利益を回避しようとする内容の項目であるため、第3因子には「不利益回避」因子と名付けた。第4因子にはストレスの発散や、健康、体力の維持、増進に関わる4項目が高い負荷を示していることから、「健康・体力」因子と命名した。第5、第6、第7因子にはそれぞれ2項目が高い負荷を示した。第5因子には部活動継続が有する社会的効果に関する項目が含まれていることから、「社会的有用性」因子と名付けた。第6因子はチームの雰囲気、平等性に関する項目を含むことから、これに「自由・平等性」因子と名付けた。第7因子にはやめることに伴う漠然とした不安を回避しようとする内容の項目が高い負荷を示していることから、「不安回避」因子と命名した。抽出された7つの因子の貢献度をみると、「達成」因子のそれが26.0%と最も高く、体育学部学生の

表3 回転後の因子負荷行列

| 項目\因子 | F 1 | F 2 | F 3 | F 4 | F 5 | F 6 | F 7 |
|----------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 31 | .763 | .223 | -.092 | .036 | -.124 | .082 | .074 |
| 2 | .739 | .098 | -.079 | .113 | -.021 | .016 | .125 |
| 12 | .739 | .123 | -.041 | .023 | -.102 | .034 | .003 |
| 4 | .727 | .042 | -.100 | .168 | -.022 | .142 | .052 |
| 21 | .697 | .283 | -.023 | -.043 | .072 | .147 | -.079 |
| 23 | .650 | -.097 | .054 | .163 | .222 | .024 | -.016 |
| 24 | .527 | .454 | -.037 | .356 | -.067 | .161 | .087 |
| 15 | .503 | .397 | .011 | .282 | -.160 | .079 | .179 |
| 42 | .311 | .642 | -.006 | .111 | .027 | .094 | .055 |
| 43 | .166 | .640 | .084 | .146 | .087 | .194 | -.007 |
| 44 | .106 | .599 | .135 | .144 | .089 | .041 | .173 |
| 37 | .347 | .595 | .273 | .130 | -.052 | .040 | .089 |
| 39 | .505 | .558 | .061 | -.103 | .052 | .166 | -.049 |
| 51 | -.040 | .551 | .188 | .116 | .387 | .025 | .026 |
| 46 | .299 | .551 | .134 | .181 | .019 | .094 | .040 |
| 48 | .134 | .544 | .053 | .155 | .139 | .126 | .283 |
| 52 | .068 | .505 | .225 | .192 | .049 | -.056 | .360 |
| 27 | -.018 | .056 | .830 | .082 | .052 | .091 | -.016 |
| 16 | -.073 | .107 | .755 | .157 | .144 | .016 | .020 |
| 13 | .049 | .024 | .735 | .072 | .026 | -.012 | .269 |
| 8 | -.132 | -.043 | .697 | .082 | .134 | -.014 | -.058 |
| 25 | .101 | .174 | .633 | .005 | .109 | .136 | -.112 |
| 36 | -.081 | .175 | .584 | -.001 | .062 | .122 | .231 |
| 10 | .017 | .164 | .502 | .228 | .001 | .095 | .232 |
| 18 | .031 | .279 | .154 | .645 | .081 | .326 | .100 |
| 17 | .091 | .320 | .154 | .639 | .178 | .035 | .016 |
| 7 | .168 | .105 | .131 | .628 | -.003 | -.101 | .091 |
| 26 | .059 | -.032 | .310 | .560 | .085 | .039 | .018 |
| 40 | .014 | .076 | .153 | .068 | .808 | .024 | .014 |
| 47 | -.082 | .054 | .248 | .009 | .781 | .024 | .077 |
| 20 | .169 | .160 | .092 | .075 | -.018 | .641 | .128 |
| 30 | .367 | .220 | .175 | -.007 | .088 | .512 | .099 |
| 50 | .091 | .230 | .267 | .050 | -.042 | .248 | .664 |
| 49 | .180 | .224 | .231 | .084 | .160 | .165 | .640 |
| 貢献量 | 13.525 | 5.653 | 2.075 | 1.836 | 1.571 | 1.251 | 1.181 |
| 貢献度(%) | 26.0 | 10.9 | 4.0 | 3.5 | 3.0 | 2.4 | 2.3 |
| 累積貢献度(%) | 26.0 | 36.9 | 40.9 | 44.4 | 47.4 | 49.8 | 52.1 |

注) F1-F7に含まれなかった項目は記載していない。

運動部への参加動機に関わる最も重要な因子であることが理解できる。

以上の7つの動機の内、「達成」、「健康・体力」、「社会的有用性」、「自由・平等性」の4つの動機は、その重要度こそ若干異なるものの、著者による前回の調査²⁸⁾を通じて明らかとなった動機と一致した。一方異なったところは、前回の「回避」動機が、今回は部活動をやめることに伴う具体的な不利益の回避を意味する「不利益回避」動機と、漠然とした不安の回避を意味する「不安回避」動機という2つの下位の次元に分かれたことと、前回の「親和」と「固執」の各動機が、今回は最後までやめなくて続けることに伴う、有形、無形の満足感に対する期待を意味する「期待」動機に統合されたことの2点である。以上のように、上位の概念に統合された動機や、下位の概念に分離した動機も存在するが、全体的にはその意味する内容はほとんど変わらない。従って、大学生の運動部参加の動機は比較的安定した要因によって説明されるのではないかと推察される。

さて、各動機の重要度に観点を移してみると、一般学生をも含めた前回調査の結果は、やめることに伴う対人関係を中心としたトラブルを考えるとやめられないということの意味する「回避」動機が最も重要であった。一方今回の調査は、「達成」動機が最も重要であることを示し(貢献度26.0%)、技術や記録の向上が体育学部学生の部活動継続の重要な要因になっていることを明らかにした。このことは試合に勝つことや、技術、記録の向上ということに関して、高い動機づけ水準にあると考えられる体育学部学生を調査の対象としたことの反映ではないかと考えられる。しかしこうしたポジティブな要因以外にも、「不利益回避」動機や「不安回避」動機に代表されるように、やめることによって生じるであろう不利益や不安を免れたいというネガティブな要因が選手の部活動継続に関与していることも認められた。またこのことから「回避」動機が、具体的な不利益の回避に関わる側面と、漠然とした不安の回避に関わる側面を持つ多次元の概念であることが確認できた。

2. 正選手と補欠選手の参加動機の比較

表4には、正選手と補欠選手の運動部参加の動機を比較した結果を示した。表より「達成」動機と「自由・平等性」動機で、それぞれ0.1%水準と5%水準の有意差が生じていることが読み取れる。次に素点の平均値をみても、「達成」動機(正選手の32.723に対し補欠選手の27.832)、「自由・平等性」動機(正選手の

6.708に対し補欠選手の5.779)のいずれもが補欠選手よりは正選手に強い影響を及ぼしていることがわかる。このことは、正選手は補欠選手よりも、記録や技術の向上とチームの雰囲気や自由であることを運動部に所属し続ける理由としているということの意味する。特に、「達成」動機で両者に最も顕著な差異が生じたということは、正選手が記録や技術の向上を自己の運動部参加の重要な理由としているのに対し、補欠選手の場合には、達成をその本質的要因とするスポーツを行いつつも、そうした要因を部活動継続の重要な理由にしていないことを意味している。しかし、正選手とは異なり補欠選手を運動部へと積極的に関わらせている独特な要因については明らかではない。

表4 正選手と補欠選手の参加動機の比較

| 動機名 | 正選手 | 補欠選手 | T-値 |
|--------|--------|--------|---------|
| 達成 | 32.723 | 27.832 | 4.75*** |
| 期待 | 34.813 | 32.862 | 1.64 |
| 不利益回避 | 20.553 | 18.596 | 1.75 |
| 健康・体力 | 13.333 | 14.200 | 1.35 |
| 社会的有用性 | 6.458 | 6.447 | .03 |
| 自由・平等性 | 6.708 | 5.779 | 2.58* |
| 不安回避 | 6.396 | 6.368 | .07 |

注) * $p < .05$ *** $p < .001$

表5 正選手と補欠選手の原因帰属様式の比較(帰属要因別)

| 帰属要因 | 正選手 | 補欠選手 | T-値 |
|--------|-------|-------|--------|
| 努力 | 3.250 | 2.837 | 3.15** |
| 能力 | 2.875 | 2.815 | .40 |
| 運 | 2.833 | 2.370 | 3.06** |
| 課題の困難度 | 2.396 | 2.902 | 3.16** |

注) ** $p < .01$

3. 正選手と補欠選手の原因帰属様式の比較

正選手と補欠選手の原因帰属様式を帰属要因別に比較した結果を表5に示した。表より「努力」、「運」、「課題の困難度」でそれぞれ1%水準の有意差が生じたことが読み取れる。表4を視覚化したものが図1である。

図より有意差の生じた帰属要因の中でも、正選手は補欠選手よりも自らの立場に対する原因の説明を「努力」（正選手の3.250に対し補欠選手の2.837）と「運」（正選手の2.833に対し補欠選手の2.370）に帰属させる傾向があるのに対し、補欠選手の場合には、それを正選手よりも「課題の困難度」（補欠選手の2.902に対し正選手の2.396）に帰属させる傾向があることがわかる。つまり、正選手が自分が正選手になれたのは、運も良かったが努力もしたからだと判断する傾向にあるのに対し、補欠選手の場合には自分が補欠選手であるのは、入部したチームが悪かったからだと判断する傾向があるということである。

表6 正選手と補欠選手の原因帰属様式の比較 (次元別)

| 要 因 | 正選手 | 補欠選手 | T-値 |
|-------|-------|-------|---------|
| 内 的 | 6.125 | 5.652 | 2.33* |
| 外 的 | 5.229 | 5.272 | .17 |
| 安 定 | 5.271 | 5.717 | 1.77 |
| 不 安 定 | 6.083 | 5.207 | 4.26*** |

注) *P < .05 ***P < .001

次に原因帰属の4要因を統制の位置次元と安定性次元の2次元に構成し直し(表1参照)、それぞれの次元

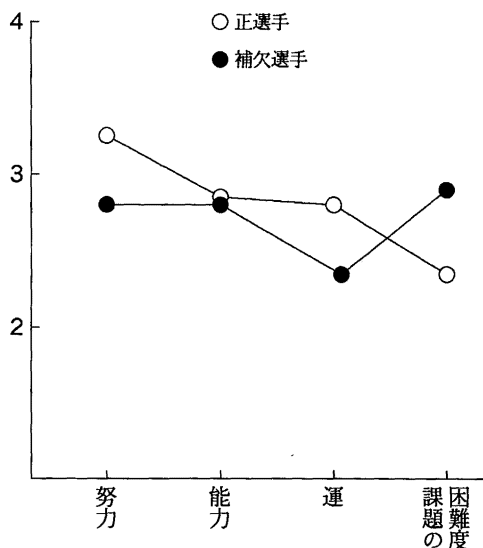


図1 正選手と補欠選手の原因帰属様式の比較 (帰属要因別)

別に正選手と補欠選手の原因帰属様式の比較を行った。結果は表6に示した。表より統制の位置次元からみた場合には内的要因(努力, 能力)で、安定性次元からみた場合には不安定要因(努力, 運)でそれぞれ正選手と補欠選手間に5%水準と0.1%水準の有意差が生じたことがわかる。表6を視覚化したものが図2である。従来より、課題の成功群は自らの成功を内的要因に帰属させ、失敗群は自らの失敗を外的原因(運, 課題の困難度)に帰属させるという、いわゆる原因帰属の自己中心主義的傾向がスポーツの達成場面においても認められるかどうか議論されてきたが、図より理解できるように本研究ではGill¹²⁾や富田²⁷⁾の研究結果と同様補欠選手の場合にはこうした傾向を示さなかった(内的要因の5.652に対し外的要因の5.272)。つまり、補欠選手には自分が補欠選手であるのは偶然ではなくて、飽くまでも自分が悪いのだとする、自分の失敗の責任を外部に押し付けることを潔しとしない内罰的な傾向が認められるということである。一方、安定性次元からみると、正選手が安定要因(能力, 課題の困難度)よりも不安定要因(努力, 運)に多くを帰属させているのに対し、補欠選手は不安定要因よりも安定要因に多くを帰属させる傾向がある。このことは、正選手が正選手としての座を自ら勝ち取ったと強く意識している一方で、補欠選手は、自分が補欠選手であるのはもはや自らの力では制御できないような原因のせいなのだ判断しているということを意味している。

以上より、正選手の場合、自分の頑張りで何とかな

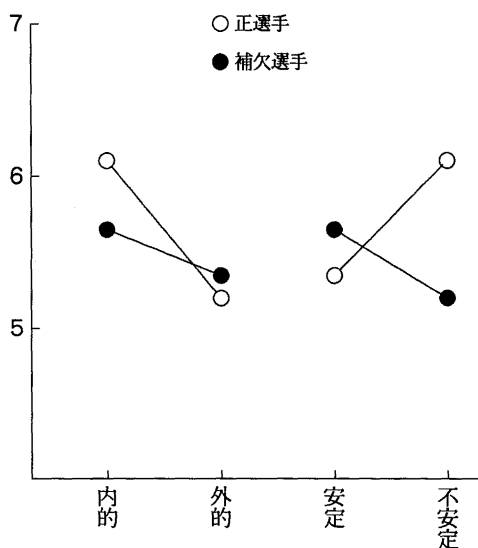


図2 正選手と補欠選手の原因帰属様式の比較 (次元別)

るとの思いが強く、達成動機も強いが、補欠選手の場合にはもはや努力しても無駄、自分の運命は自らの手では決し得ないとの半ば諦めにも似た思いが強く、達成動機は弱いと予想される。このような予想される関連性を検証するために、次に正選手と補欠選手毎に運動部参加の動機と原因帰属様式との関係を検証してみようと思う。

4. 正選手と補欠選手の参加動機と原因帰属様式の関係

表7 補欠選手の参加動機と原因帰属様式の関係

| 動機名 | 内的 | 外的 | 安定 | 不安定 |
|--------|---------|-------|-------|--------|
| 達成 | -.284** | -.001 | -.049 | -.247* |
| 期待 | -.277** | .155 | .072 | -.210* |
| 不利益回避 | .102 | .074 | .117 | .055 |
| 健康・体力 | .050 | .031 | -.029 | .117 |
| 社会的有用性 | .012 | -.132 | -.045 | -.075 |
| 自由・平等性 | -.135 | -.067 | -.094 | -.109 |
| 不安回避 | -.084 | .057 | .026 | -.058 |

注) * $p < .05$ ** $p < .01$

正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式との関係を、単回帰分析により検証したが、正選手の場合には参加動機と原因帰属の様式間に何等有意な相関は認められなかった。一方補欠選手の場合には、表7に示すように内的帰属と「達成」動機、「期待」動機との間に1%水準の負の有意な相関(それぞれ $r = -.284$ と $r = -.277$)が、そして不安定要因と「達成」動機、「期待」動機間に5%水準の負の有意な相関(それぞれ $r = -.247$ と $r = -.210$)が認められた。つまり、自分が補欠選手であることを自分の努力不足や能力不足のためだとする者ほど、また、自分の努力不足や運のなさに帰属させる者ほど、記録を向上させようとか部活動から得られるであろう満足感に対する期待を部活動継続の理由としないということである。いずれも努力不足を認めつつもそれが向上心や部活動の与える満足感に結び付いておらず、もっと努力すれば良かったという後悔の念か、もはやどうすることもできないという諦めの感情がこうした結果を導いたものと思われる。このように、本研究を通じて明らかとなった補欠選手の有する諦めの感情は、調査対象者が3年生であることと関連があるのかもしれない。つまり、残さ

れた大学生活の中では自分の運命が劇的に変化することはないであろうという思いは、こうした感情に容易に転化し得ると思われるからだ。

要 約

本研究は正選手と補欠選手の大学運動部への参加動機と、原因帰属様式との関係を検証することを目的として行われた。体育を専攻し、大学運動部に所属している3年生の218名が調査の対象となった。運動部への参加動機の質問項目には、著者(1990)が独自に作成したものが用いられた。また原因帰属様式の測定には、Weiner et al.による原因帰属の4要因の修正版が使用された。

主な結果は以下に示すとおりである。

1. 因子分析の結果、大学生の運動部参加の動機が7つのカテゴリーによって説明されることが明らかとなった。これらはそれぞれ、「達成」動機、「期待」動機、「不利益回避」動機、「健康・体力」動機、「社会的有用性」動機、「自由・平等性」動機、「不安回避」動機と名付けられた。以上の結果は、著者による前回の調査より得られた結果とほとんどの部分が一致した。これらの動機の中でも、「達成」動機が最も重要であった。

2. 原因帰属様式に関する比較研究は、正選手と補欠選手に彼らが正選手あるいは補欠選手であった理由を尋ねることにより実施された。原因帰属の4要因毎の比較の結果、正選手は補欠選手よりも「努力」と「運」により帰属させる一方で、補欠選手は正選手よりも「課題の困難度」により帰属させることが明らかとなった。次に、統制の位置次元と安定性次元という原因帰属の2次元からの比較研究が行われた。結果は、正選手も補欠選手も外的要因よりも内的要因により多くを帰属させること、そして、安定要因と不安定要因が正選手と補欠選手に逆の影響を及ぼすことを示した。従って補欠選手の場合、自己中心的な原因帰属パターンは本研究では支持されなかった。

3. 最後に、正選手と補欠選手の参加動機と原因帰属様式との関係が検証された。補欠選手に関して負の有意な相関が、内的帰属、不安定帰属と「達成」動機、「期待」動機間に存在した。このことは、補欠選手は努力不足ゆえに正選手になれなかったと認識しているにもかかわらず、彼らが最善をつくす気のないことを意味している。

引用・参考文献

- 1) 荒木 昭好, 野村 武雄, 富樫 泰一: 成人スイマーの参加動因. 東京体育学研究, 14 : 19-23, 1987.
- 2) Bird, A.M.: Development of a model for predicting team performance. In Loy, J.W., Kenyon, G.S. and McPherson, B.D. (Eds.), Sport, culture and society. 2nd, Revised ed., Lea & Febiger, Philadelphia, 1981. pp.74-80.
- 3) Carron, A.V.: Social psychology of sport. Movement Publication, New York, 1980. Pp. 320.
- 4) Carron, A.V.: Processes of group interaction in sport teams. Quest, 33 : 245-270, 1982.
- 5) Carron, A.V. and Ball, J.R.: An analysis of the cause-effect characteristics of cohesiveness and participation motivation in intercollegiate hockey. International Review of Sport Sociology, 12 (2) : 49-60, 1977.
- 6) Carron, A.V., Ball, J.R. and Chelladurai, P.: Motivation for participation, success in performance and their relationship to individual and group satisfaction. Perceptual and Motor Skills, 45 : 835-841, 1977.
- 7) Carron, A.V. and Chelladurai, P.: The dynamics of group cohesion in sport. Journal of Sport Psychology, 3 : 123-139, 1981.
- 8) コーファー(祐宗 省三訳): 動機づけと情動. 心理学叢書 3, サイエンス社, 1981. Pp.265. (Cofer, C.N.: Motivation and emotion. Scott, Foresman and Company, Illinois, 1972.)
- 9) Cooper, R. and Payne, R.: Personality orientations and performance in soccer teams. British Journal of Social and Clinical Psychology, II : 2-9, 1972.
- 10) デシ(安藤 延男・石田 梅男訳): 内発的動機づけ. 誠信書房, 1980. Pp.374. (Deci, E.L.: Intrinsic motivation. Plenum, 1975.)
- 11) Dishman, R.K., Ickes, W. and Morgan, W. P. : Self-motivation and adherence to habitual physical activity. Journal of Applied Social Psychology, 10 (2) : 115-132, 1980.
- 12) Gill, D.L.: Success-failure attributions in competitive groups: An exception to egocentrism. Journal of Sport Psychology, 2: 106-114, 1980.
- 13) Gill, D.L., Gross, J.B. and Huddleston, S.: Participation motivation in youth sports. International Journal of Sport Psychology, 14 : 1-14, 1983.
- 14) Gould, D., Feltz, D. and Weiss, M. : Motives for participating in competitive youth swimming. International Journal of Sport Psychology, 16 : 126-140, 1985.
- 15) 広瀬 幸雄, 石井 徹, 木村 昌幸, 北田 隆: 達成動機と原因帰属がパフォーマンスに及ぼす効果. 実験社会心理学研究, 22 : 27-36, 1982.
- 16) 伊藤 豊彦: スポーツにおける原因帰属様式の因子構造とその特質. 体育学研究, 30 : 153-160, 1985.
- 17) 伊藤 豊彦: 原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響. 体育学研究, 31: 263-271, 1987.
- 18) 伊藤 豊彦: 「原因帰属と動機づけ」. 松田 岩男, 杉原 隆編著, 運動心理学入門, 大修館書店, 1987. pp.68-73.
- 19) Klint, K.A. and Weiss, M.R.: Dropping in and Dropping out: Participation motives of current and former youth gymnasts. Canadian Journal of Applied Sport Science, 11 (2) : 106-114, 1986.
- 20) Lefebvre, L.M.: Achievement motivation and causal attribution in male and female athletes. International Journal of Sport Psychology, 10 : 31-41, 1979.
- 21) Martens, R.: Influence of participation motivation on success and satisfaction in team performance. The Research Quarterly, 41 : 510-518, 1970.
- 22) Martens, R. and Peterson, A. : Group cohesiveness as a determinant of success and member satisfaction in team performance. International Review of Sport Sociology, 6: 49-61, 1971.
- 23) マレー(八木 晃訳): 動機と情緒. 現代心理学入門 3, 岩波書店, 1966. Pp.176. (Murray, E. D.: Motivation and emotion. Prentice-Hall, 1964.)

- 24) 丹羽 劭昭, 村松 洋子: 女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究. 体育学研究, **24**: 25-38, 1979.
- 25) Passer, M. W.: Children in sport: Participation motives and psychological stress. *Quest*, **33**: 231-244, 1982.
- 26) Robinson, T. T. and Carron, A. V.: Personal and situational factors associated with dropping out versus maintaining participation in competitive sport. *Journal of Sport Psychology*, **4**: 364-378, 1982.
- 27) 富田 真生: スポーツ達成場面における原因帰属と動機づけに関する研究. 第6回体育・スポーツ若手研究者の会発表資料, 1987.
- 28) 山本 教人: 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較. 体育学研究, **35**: 109-119, 1990.
- 29) 米川 直樹: 「動機づけの意味」. 松田 岩男, 杉原隆編著, 運動心理学入門, 大修館書店, 1987. pp. 55-58.
- 30) Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, L., Rest, S. and Rosenbaum, R. M.: Perceiving the causes of success and failure. In Jones, E. E., et al. (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*, General Learning Press, New Jersey, 1971. pp. 95-120.